

佐々木八郎

——実証と文学への熱情と——

一 はじめに

軍記文学、とりわけ『平家物語』を中心に、日本中世文学研究に大きな足跡を印せられて、三年前に長逝された佐々木八郎先生について、著書を中心に、その学風や研究史上の位置を論ぜよというのが、小稿に課せられた課題である。しかし、長年、先生の教えをうけてきた者の一人として、先生を客観的に論ずることは大変むづかしいことであるし、先生の広く深い学問上の業績を評價し、位置づける力もない。したがって、小稿は、二十年ほど前に先生の講筵に列なつた一学生が、先生のお仕事をどのようによくとめてきたかという、一面的な報告にとどまるであらうことを、あらかじめお許し願いたいと思う。

佐々木先生は、大正八年、早稲田大学高等師範部国語漢文学科を卒業された後、昭和五年から、同高等師範部の教壇に立たれた。爾来、昭和四十四年に定年退職されるまで、四十年にわたって、一貫して早稲田大学の教育や行政に尽力される一方、中世文

学の研究に精励され、学界をリードする、すぐれた論考を次々と公けにされた。その先生の主要な著作を、年代順に挙げてみると、次のごとくである。

加 美 宏

平家物語講説

昭13・5

三省堂

(昭和25年10月、早大出版部より増訂版刊行)

日野資朝卿

昭15・6

富山房

芸道の構成

昭17・8

富山房

(のち第三版を「芸能」第四版を「芸道」と改題)

古典中世戦記文学
鑑賞

昭18・9

鶴書房

語り物の系譜

昭22・12

講談社

(昭和52年11月、笠間書院より増補版刊行)

平家物語の研究上・中・下

昭23・5

早大出版部

(昭和42年10月、早大出版部より増補版刊行)

平家物語評講上・下

昭38・2

明治書院

徒然草の味わい方

昭48・9

明治書院

平家物語の達成

昭49・4

明治書院

二 『平家物語講説』

佐々木先生が、ライフワークというべき『平家物語』研究と取り進むこととなった、そもその機縁は、早稲田の高等師範部における作文や英語の授業を通して、大きな感化をうけていた五十嵐力博士の『平家物語の新研究』(『早稲田文学』大正9・10)を読んで、『平家物語』を文学として研究・評価する眼を開かれたことであつたといふ。さらに昭和五年から、高等師範部の授業で、『平家物語』を担当することとなったが、テキストに用いた流布本に、難渋な語句が少なくないことから、研究熱心な先生は、『平家物語』諸本を比較検討してみることを思い立たれた。その折に、最初に手をつけられたのが、当時、松井簡治氏が秘蔵されていた延慶本『平家物語』の調査であつた。松井氏宅に通つて延慶本を借覧しながら、「ともするとこれが私の生涯の仕事になるのではないか、という予感があつた」と、先生は回想されている。そして、当時まだ注目されていなかった延慶本が、語り本とは大きな差異を持つ重要な異本であることを確認された先生は、さらに語り本の源流をさぐるべく、高野辰之氏所蔵の屋代本を借覧したのをはじめ、『平家物語』の主要な諸本を次々と精査された。こうして、昭和十年頃には、『平家物語』本文の変化・発展の過程を実証的にあつづけた『平家物語の成長発達』という稿を成されたが、公刊の機を得ぬまま、その研究成果を、「評説」という項目に盛りこんで、注釈書の体裁をとつて刊行されたのが、先生

の最初の著書である『平家物語講説』(昭13)であつた。

本書は、『平家物語』の主要な章段五十を選び、それに解説と批評を加えたものであり、各段は、本文(万治版本を底本)・訳註・考異・評説の四項目より成つているが、本書の眼目が「評説」の項にあつたことは、いふまでもあるまい。この「評説」は、「本文批評的研究に立脚して」、「『平家物語』の文学としての成長発達の跡を具体的に究明し、史実が如何に文学化せられてあるかといふ姿と事情とをも学問的に考察し」たものである。先生自身、「これは『平家物語』研究における最初の試みであつたと思ひます」と自負されているように、この「考説」は、『平家物語』研究に、新しい視点と方法をもたらしたものであつた。そのことは、本書についての当時の書評によつてもうかがうことができる。例えば、富倉二郎氏は、本書の「評説」の項について、「そこには文章美の鑑賞批評を試みると共に、平家物語の文章叙述の流動文学としての成長径路を推定しその成長美を考究されてゐるのであり、此処に此の書が今迄の註釈書に無き一面を持つもの」と評価されているし、阪口玄章氏は、本書が文章美の鑑賞批評に重点を置いてゐる点に関して、佐々木先生の恩師五十嵐力氏の影響を指摘しながら、

「佐々木氏はこの五十嵐博士の示唆せられた所を更に推しすすめて異本の比較研究による脚色の変遷にまで縦にこれを眺める世界に前進せられたものと思ふ」と、佐々木先生による研究の新たな発展を認められている。

こうした「評説」の成果ばかりでなく、注釈と研究とを合体させて、「講説」という新分野を拓かれた創意や、実証的・学問的でありながら、同時に文学的香気を持った名文は、学界や読書界に新鮮な刺激をもたらし、好評をもって迎えられたようである。その間の状況については、富倉氏の次の一文に尽くされている。

「この書の持つ多くの卓説は、平家物語研究家が待望していた註積分野の開拓に大きな寄与を与えたものであり、更にその学的良心とその文学的才筆とはこの書を一般国文学愛好者への読み物としても価値高く興味あるものたらしめてゐることを特に記すに躊躇しないものである」

処女作には、その作家のすべてが含まれているといわれるが、先生の最初の著作である『平家物語講説』の場合も、先生の学問的態度や文学的才筆があらわれているばかりでなく、諸本本文や史実などを実証的にふまえた上で、文学としての達成をみるという研究方法が、すでに明確に姿をあらわしており、後年の『平家物語の研究』『平家物語評講』『平家物語の達成』などは、その延長線上にあることが知られよう。

三 『日野資朝卿』

こうして、「将来を嘱目せらるる少壮有為の学者⁽⁹⁾」として認められた先生の第二番目の著作が『日野資朝卿』（昭15）である。本書は、佐渡出身の実業家舟崎由之氏の委嘱により、正中の変によって佐渡に流され、そこで斬られた日野資朝と、父を尋ねて京から佐渡に下った邦光（阿新丸）父子を顕彰すべく、その伝記を

草したものである。本書の構成は、「博く史実や口碑を渉猟し、叙述の根幹は忠実にこれに準拠するとともに、枝葉にまます多少の創意を交へて、「日野資朝卿父子」といふ一篇の短き通俗の伝記物語式な姿を帯びさせたもの」と、資朝に関する史実・史蹟の考証・調査などを収めた「資朝卿雜説」「余録」「付録」から成っている。物語風の「日野資朝卿父子」には、先生の「文学的才筆」が縦横に発揮されているし（翌年には「日野資朝」という戯曲⁽¹⁰⁾まで執筆されている）、「資朝卿雜説」などの考証・調査は、対照的に実証に徹したものである。

本書の中で注目されるのは、資朝という人物を、鎌倉幕府討伐のために奔走する「烈々の丹心に燃ゆる革命児⁽¹¹⁾」としてとらえられていることである。これは、後年、著わされた『徒然草の味わい方』（昭48）の中で、第127段について、実質と自然を尚び、権力に抵抗し、果敢断行の人であった革新貴族資朝の、烈々たる気魄と、それに共鳴した兼好のはりつめた精神が、こちらに伝わってくるような力強い鑑賞をされ、それが、この書のヤマ場の一つとなっていることも照応している。また先生は、「佐渡の出身であるという因縁に感じ⁽¹²⁾」られて、本書を執筆したとも記されているが、それに関連して、佐渡に生れ育たれた先生が、北一輝・有田八郎・青野季吉といった佐渡生れの叛骨の系譜⁽¹³⁾について、よく語っておられ、先生御自身も、その系譜に位置づけておられたことが想起される。佐渡で斬られた「革命児」資朝に強い関心を寄せられたことも当然のことであったといわねばならない。本書の執筆も、その一つのあらわれであるが、郷里佐渡に寄せ

られた先生の愛着の深さは、なみなみのものではなかつた。佐渡について書かれた文章も少なくないが、とりわけ佐渡の文称人形・野呂間人形についての見聞調査をまとめられた「佐渡の人形・芝居」(『諸国人形芝居』所収、昭24、講談社、のちに『雲来去』に再収、昭54)は、戸谷三都江氏が、かつて「幻の名著」と呼ばれたように、現在も有益にして、かつ貴重な研究文献であろう。

四 『芸道の構成』と『語り物の系譜』

先生はまた、旺盛な研究・教育活動のかたわら、謡曲の稽古に励まれ、能・歌舞伎の舞台へも足繁く通われた。こうした古典芸能への親近・精通と、つねに根源を尋ね、体系化せずばやまないという学問的情熱とが合体して、見事な成果を生んだのが、『芸道の構成』(昭17)と『語り物の系譜』(昭22)の二著である。

『芸道の構成』は、まず「芸道の展開」として、歌道・能楽道・茶道・俳諧道・芝居道など諸芸の道が、どのように発生し展開したかを展望した後、「芸道の精神」として、理念・伝統・稽古という三つの面から、諸芸道における精神的なものを追究し、体系づけたものである。そして、わが国の芸道に内在する日本の性格とは、「実用本位・遊楽本位であったものの精神化といふことである」と結論されている。

一方、『語り物の系譜』は、古代語り部の伝誦から、中・近世の琵琶法師・物語僧・盲御前の語り、能・幸若・説経・浄瑠璃を経て、近代の講談・浪曲にいたる語り物のそれぞれに考察を加え、その史的な展開の相を明らかにしたものである。語り物は

「大衆芸術」であるという先生の結論は、語り物の本質を見事に言いあてたものといえよう。

この芸能関係の両著に共通してみられる特徴的な点をあげてみると、第一に、先生自身、「中世において確立し、その伝統が今日まで継承され、もしくは発展した古典的諸芸能にわたって、伝統精神をひとわたり考察し、一応の形にまとめてみたい」(第四版「芸道」の「序」)、「平家琵琶がその重要な位置と役割りとを持つてゐるわが国の「語り」と「語り物」とについて、昔から今までのおほよその歴史を探ねたい」(『語り物の系譜』初版「序言」)といわれているように、その考察が、総合的・体系的であり、その対象がどのように発生・展開して現在に及んでいるかという歴史的視野と現在の観点を持つてゐることである。

特徴の第二点は、「なるべく「語り」に関連して先学や同学の論究されなかつた点を主として考察しよう」と意図した「(『語り物の系譜』初版「序言」)といわれているように、従来の研究をよく参照、検討された上で、独自の見解を提出されたり、新知見を加えられているところが、非常に多いということである。一例をあげると、『結城戰場物語』の詞章に、語りの慣用語が用いられているところから、同書を物語僧の語り物ではないかと推定された先生の卓見は、今日でも、すこぶる示唆的である。

特徴の第三点は、「できるだけ抽象論を避け、実証をむねとして考察したつもりである」(『語り物の系譜』初版「序言」)といわれているように、いたずらな抽象論を排し、具体的・実証的に論をすすめ説をなされていることである。『芸道の構成』では、

「古い歌学書や芸能人の遺した伝書や芸談の類」、『語り物の系譜』では、語りに用いられた本文の詞章や古記録の類など、確かな資料に拠って立論されているし、論拠を明らかにし、具体的・論理的に書かれているから、常に論旨が明晰であることも、大きな特徴であろう。このようなすぐれた諸特徴を具備した両著が、初版以来四十年を経た今日まで生き続け、現在でも研究の指針となっているのは、けだし当然といえよう。とくに『語り物の系譜』は、類書が、まったく見当らず、語り物研究の貴重な基本文献となっている。

五 『平家物語の研究』

昭和初年に始まり、二十年に及んだ『平家物語』研究の成果をまとめ、学位論文ともなったのが、『平家物語の研究』三卷(昭23)である。その成果の一部は、『平家物語講説』(昭13)という注釈書の中に盛り込まれていることは前述したが、ここにはじめて本格的な研究書として、全体系を世に問うことになったわけである。

本書は、『平家物語』の「成立」「性格」「成長変化」「影響」の四篇から成っており、『平家物語』の、ほとんどあらゆる問題点に検討を加えた包括的な研究である。第一篇「成立」においては、とくに「灌頂巻」の成立に関して、「灌頂巻」を特立していなかったのが、『平家物語』の最初の変であるが、建礼門院に関する叙述は三段階の過程を経て、「灌頂巻」として特立するにいたったことを、諸本の綿密な検討から論証したことが特筆されよう。第二篇「性格」では、文学的性格・歴史的性格・思想的性格の三方面から詳論されているが、とりわけ史実と虚構との関係を追求する

ことで、『平家物語』の歴史文学としての特質を明らかにしているところに力点がある。

第三篇「成長変化」は、『平家物語』の叙述や本文それ自体が長い年月の間にいかに変化し成長したか、またその変化と成長とを遂げた事由はどこに在ったか、といふことについて、「克明に異本の本文の一つ一つに当って、実証的な、また帰納的な検討をしたもの」であり、この成長変化する文芸としての『平家物語』に関する実証的研究こそ、先生の『平家物語』研究の主眼をなすものであり、後の『平家物語の達成』(昭49)にも継承・深化せしめられるものである。第四篇「影響」は、『平家物語』が『義経記』『曾我物語』を始めとして、近古小説・謡曲・幸若舞曲・浄瑠璃・歌舞伎脚本・江戸小説の如き中世及び近世の文芸から、近くは明治・大正の小説と戯曲とに及ぼした影響についてひたすら考察を試みた⁽¹⁵⁾もので、後代に及ぼした影響の大きさという点でも、一種民族文学的なひろがりを持つ『平家物語』の特質を、具体的・網羅的に調査・検証した意義は大きいといえよう。

このように本書は、文学としての『平家物語』研究の諸分野に、確かな礎石をすえたものであり、戦後における『平家物語』研究の出発点となったものである。ただし、先生自身、「烏兎匆々」などで回想されているように、本書の公刊は戦後であるが、「影響」の項の一部を除いて、本書の大部分は、戦後ではなく、戦前・戦中において執筆されたものであることを確認しておかねばならない。『国語国文学研究史大成9、平家物語』の「研究史通観」(高木市之助氏)は、その昭和後期(戦後)の項で、本書につい

て、「単に本期ばかりでなく、平家物語の全研究史を通じてまれに見る大著であり、しかも随所に戦後の傾向を撰取している点もまた看過することのできない業績である」と評価しながらも、「必ずしもそこに、この期の特徴である変革的な意欲といったものを認めることはできず、それゆえに、われわれはあえて本書を本期研究史の中心にすえなかつた」としている。この批評は、本書が戦後の研究・執筆であることを前提としてなされているが、戦後のものでなかつたことは前述の通りである。それでいて、なおかつ「随所に戦後の傾向を撰取している点」が認められたとすれば、それは、とりもなおさず、佐々木先生が戦前・戦中において、いかに先見的に戦後の動向を先取りしていたかを示すものにはかならず、先生の光栄とせねばならないのであろう。本書の原型ともいふべき『平家物語講説』の視点や方法が、いまなお新鮮であることも思いあわされる。そうした点をもふくめて、本書については、『平家物語』研究のための「必読の書」(石母田正氏)であり、「平家物語」研究史の基本的な研究文献として揺がぬ位置を占めている。(栃木孝惟氏)といった評価が定着しているといつてよからう。

六 『平家物語評議』

『平家物語の研究』が上梓された昭和二十三年頃から、先生は、いわゆる「お役人みたいな雑事」(早稲田大学の学生部長・教育学部長・常任理事、文部省の大学設置審議会委員・国語審議会委員など)に奔走され、さらに中世文学会・説話文学会などの設立・運

営にも大いに力をつくされた。そうした激務のただ中であって、ものされた次の大著が『平家物語評議』上下二冊(昭38)である。

本書は、寛一本系統の岩波文庫版『平家物語』(山田孝雄校訂)を底本として、その全巻一九二章段にわたって、「口訳」(現代語訳)「摘解」(語釈)「評説」(鑑賞批評)を行ったものである。すなわち、さきの『平家物語講説』は、代表的な五十章段を抽出して、注解と鑑賞批評を加えたものであったが、本書は、それを全章段に及ぼしたものとみることができよう。

本書のねらいとしたところについて、先生自身、「文芸としての鑑賞・批評と、かねては記録的史実と文芸的虚構の実情と——この二つの面を主たる趣意としたものであった」と述べられている⁽²⁰⁾。本書の随一の特色が、この「記録的史実と文芸的虚構の実情」を解明したところにあることは、諸家のひとしく指摘するところである。いま、長野嘗一氏の書評を引いてみる。

「本書随一の「見処」は「評説」で、史実と文学との比較検討は群書をはるかに抜いて精彩を放っている。すなわち玉葉・山槐記・吾妻鏡・百鍊抄・愚管抄・吉記・明月記・左記・方丈記から高倉院殿島御幸記・高野春秋編年輯録の末に至るまで、史料という史料を漁り尽くして、これと平家本文とを比較し、史実と虚構との境界を明らかにし、かかる虚構を作者はなぜに仮構したかを、いちいち検討する。一日片時の時日の相違まで見落さない炯眼は敬服に値する。」

こうした史実との対比や諸本との本文対照などを手がかりとした、文芸としての深い読み・鑑賞が、本書を、今日もなおすこぶ

る有益な書とされているといえよう。そうした文芸としての読みを、全巻の構造に及ぼしたのが、「解説」中の「構造と意味」の章であるが、これもすぐれた構造論として注目されている。本書のように『平家物語』の全文にわたって詳細綿密な注解・考察・批評を加えたものは、かつてなかったし、その後においても、富倉徳次郎氏『平家物語全注釈』を見るのみである。

七 『平家物語』の達成

諸本の本文を比照考察することで、『平家物語』の「語りもの文芸」としての成長変化の相と、その文学的達成を明らかにすることは、最初の著作『平家物語講説』以来、先生の『平家物語』研究の主眼をなすものであったが、『平家物語評議』を完成した後、昭和四十年代は、主として、これと取り組まれ、その成果をまとめたものが、『平家物語の達成』（昭49）である。

先生はこれまで、『平家物語』が、屋代本や延慶本などに遺存する古態的な形から、覚一本やその系統の流布本のような形に、語りものとして彫琢され、より文芸化されてゆく過程やその事由などを追求されてきたのであるが、この期の先生は、昭和四十二年に公刊された四部合戦本平家物語に、より古朴と思われる叙述が遺存すると認められ、主として四部本・屋代本・覚一本の叙述を比照され、覚一本における文芸的達成を確認するという方向をとられた。

ところが、ちょうどその頃、四部本と延慶本とのいずれにより古態を認めるかという論争が『平家物語』研究者の間で行なわれ

ており、四部本は、延慶本的な本文をもとに、それを略述した後、出本とする立場に立たれた水原一氏は、佐々木先生の達成論は、四部本古態説に傾斜した立場よりのものとみなされて批判を加えられ、先生の達成論は、途中から水原氏との論争という形をとって進行することとなった。先生の達成論は、自身でも再三述べられているように、四部本の中から「比較的に古態性を遺存している」と推測される本文・叙述を抽出して、それを屋代本・覚一本と比照することで、覚一本における文芸的達成を明らかにすることを主目的とされており、四部本そのものが古態本とする説はとられていないから、この論争は、かみあいにくい側面を持っていたことは否定できないが、同時に細部の本文の読みとり方をふくめて、『平家物語』をいかに読むか、どのように把握するかをめぐる論争でもあったから、決して不毛の論争ではなかった。

古稀を超えられた先生が、幾世代も若い研究者と全力をあげて論争を展開される姿は、実にさわやかであったし、そうした先生のボレミークな達成論に刺激されて、水原氏らの研究の進展もあったといえよう。本書は、こうした学問的な緊張感をはらんだ論集として、また諸本の対比を武器として、『平家物語』の文芸性と正面から取り組んだ意欲的な研究書として、今後も生きつづけるものと思われる。

八 『中世文学の構想』

先生の最晩年にあたる昭和五十年代には、軍記物語が、先行の歴史物語などを継承しながら、その様式を確立してゆく過程や、

『平家物語』の原態というべきものの追求を意図され、いくつかの論を草されたが、残念なことに、この企図は十分には達成されずに終わった。もう一つ、この期に情熱をかたむけられたのは、『方丈記』の文学的構造と意味とを解き明かす研究である。この期の『方丈記』に関する御論が、『方丈記』の研究史の上でも特筆されるべきものであることは、関口忠男氏「佐々木八郎先生と方丈記」が明らかにされている通りである。先生の『方丈記』論の特質や意義については、右の関口氏論文に詳述されている。

こうした最晩年の先生の業績は、先生の御長逝から一年の後に刊行された『中世文学の構想』(昭56)に収められている。この遺著には、ほかに、未発表の旧稿「注釈における学的发展」「鎌倉の小説」「室町小説論」などの力作も収載されているが、これらを見れば、先生の中世文学研究の幅の広さと深さに改めて驚かされよう。

本書のみならず、先生のすべての文芸研究を貫いている特徴的なことを、一言にしていうならば、常にきびしい実証的な態度・方法と、鋭敏な感性をもって、中世文学の諸作品について、その文学性や文学的構造を考究してこられたという点であろう。そして、これこそ五十嵐力博士の、古典文学を、文学として研究し、鑑賞し、批評するという、いわゆる「創造批評」的研究に、若き日に医学や法学を志されたという先生持ちまえの合理性・実証性を加味して創りあげられた佐々木先生独自の学風というべきであろう。さらにいえば、こうした態度・学風を、頑固なまでに一貫されたこともまた、先生の学問の特徴であったといえよう。

注(1) 佐々木八郎氏「五十嵐力著『軍記物語の研究』(回想・

この一冊)」「国文学」20の10、昭50・8)

(2) (3) (16) (19) (20) 佐々木八郎氏「烏鬼奴々」(日本文学研究) 16号、昭52・1)

(4) (5) 『平家物語講説』増訂版(昭25) 序

(6) (8) 富倉二郎氏「新刊紹介『平家物語講説』」(国語国文) 8巻8号、昭13・8)

(7) 阪口文章氏「新刊紹介『平家物語講説』をよむ」(文学) 6巻7号、昭13・7)

(9) 田中穂積氏「日野資朝卿」序文

(10) (12) 『日野資朝卿』後記

(11) 『日野資朝卿』115頁

(13) 戸谷三都江氏「雲来去」あとがき

(14) (15) 『平家物語の研究』序

(17) 石母田正氏「平家物語」(昭32、岩波新書、217頁)

(18) 栃木孝惟氏「(解題) 平家物語の研究」(市古貞次氏編『国文学研究書目解題』昭57所収)

(21) 長野嘗一氏「新刊リーダー『平家物語評説』」(解釈と鑑賞) 29巻2号、S 39・2)

(22) 水原一氏「四部本平家古態説を駁す——延慶本古態性追求との関連——」(「軍記と語り物」8号、昭46・4) ほか

(23) 『平家物語の達成』はじめに

(24) 関口忠男氏「佐々木先生と『方丈記』」(「古典遺産」32号、昭56・9)

(25) 本書については、本誌78集(昭57・10)に山下宏明氏が懇篤にしている確かな書評を寄せられているので、参照願いたいと思う。